

BTS から考える「男らしさ」の新時代 過ちを認め、学び、変化する

聞き手・伊藤恵里奈 2022/11/19 12:00



韓国のアイドルグループ「BTS」は、「強くあれ」「弱音を吐くな」といった旧来の「男らしさ」とは逆に、弱さや過ちを認め、互いにいたわり、成長する姿を見せてきました。思うようにならない社会の中で、「もっと自分を大切にしてい、愛していい」というメッセージが支持されているとエッセイストの小島慶子さんは言います。BTS が示した新しい男性像について聞きました。

- 小島さんは、2021年にBTSに深くハマる、いわゆる「沼落ち」をしたそうですね。きっかけは、◆国連本部でBTSがスピーチしたことでした。過去の演説も検索し、世界中の若者に向けて、「失敗も含めて自分を受け入れて愛そう」「自分のことを話そう」と呼びかける18年のユニセフでの演説に深く共感しました。

人生でアイドルにハマったことは一度もなく、「**韓流を好きになるなんて、イタイおばさんのすることだ**」とすら考えていました。◆まさに女性蔑視の考えでした。

女子が熱狂するものには価値がない？

——私も同じです。1年前からBTSが好きになり、自分の偏見に気づきました。

「◆アイドルやファンがバカにされてきたのは、女性蔑視と深いつながりがある。『女子が熱狂するものには価値がない』という社会の偏見は根強いからだ」とBTS研究の第一人者が指摘していて、衝撃を受けました。

📍 BTSで人生が不可逆的に変わってしまった人々が私を含めてたくさんいます。韓国内外の研究者が年に1度「BTS学会」を開き、この現象を研究していますが、「イケメンだから夢中になるんだろう」と決めつけている人も、人気の背景を考えてみてはどうでしょうか。

——そこが今回のインタビューの目的ですが、BTSは化粧をして、髪を染めて、魅惑的なしぐさでアピールします。メンバー同士もとても親密です。エンタメ界で長年理想とされてきた、

● 強さや荒々しさを備えた男性像とは異なります。中国系政府メディアは、BTS に代表される K-POP を「男性の女性化だ」と問題視していました。

古くは日本の ◆ **忌野清志郎**や**坂本龍一**、海外でも**デビッド・ボウイ**や**ボーイ・ジョージ**など、中性的な容姿が受け入れられ、エンタメの世界で成功した人はこれまでもいます。

でも、あくまでもステージ上の話でした。日常生活で、男性がスカートをはいたり、化粧をしたりすれば奇異な目で見られます。

ところが BTS は、シートマスクで肌の手入れをしながらスウェットでくつろぐ日常も、メイクをしてステージに立つ華やかな姿も見せています。

——BTS のデビューは 13 年。15 年から 16 年ごろ、歌詞が「女性差別だ」と批判を受けました。例えば女性の外見を批評して「女は最高のギフト」としたほか、「食事を目で食べるって
いうのか？ 女みたいに」と女性を見下す表現がありました。

当時、韓国ではフェミニズム運動の高まりを受けて、BTS だけでなく色々な K-POP アイドルの歌詞や言動が批判されました。

BTS は時間はかかったものの、「女性蔑視の表現だった」と認めて、公式に謝罪しました。

偏見に気づき、変化、行動する

——かつては、彼らも誤っていた、ということですね。

そうです。その後は、ジェンダー問題の専門家の意見を交えながら、**無意識のうちに内面化されてきた女性差別的な視点が出ないように、本気で学んだのです。**

格差が拡大する新自由主義社会の中で、自分の弱みをみせる、間違いを認めることは「負け」を意味します。何もかもが自己責任の世の中では、とにかく自分が正しく、強く、いつも勝ち続けなくてははいけない。特に男性はそう思い込む傾向が強い。

韓国は日本同様、まだ**家父長制的な価値観が根強い社会**です。BTS は成長する中で知らず知らずのうちに身につけた偏見に気づき、認めて、学習して、変化して、それを行動で示したのです。

19 年にリリースされた「Boy With Luv」は、**米国の女性シンガー・ソングライターのホールジーとコラボ**しました。「あなたのことを教えて」と願い、フェミニズムに対する共感を歌っていて、過去に批判されたことへのアンサーにもなっています。

——女性蔑視の歌詞以外にも、過去の戦争を想起させる服装などをめぐって批判されたこともありました。事務所は「**傷ついた全ての人に心から謝罪する**」とし、**今後は社会的、歴史的、文化的背景への理解を深めて、細部まで点検すると発表**しました。

BTS のメンバーは地方都市出身で、小さな芸能事務所で育ち、売れない頃に悔しい思いをした経験をバネに成長しました。その努力に加えて重要だったのが、無知による過ちを認めて、学び、変化し、行動に移したことです。

——差別を指摘されると、反発したり攻撃的になったりする人もいます。女性差別に対しては、「権利を主張する女たちのせいで男が窮屈な思いをする」「むしろ損をしているのは男だ」という言動を、ネット上でも現実世界でも見かけます。

男尊女卑的な価値観に縛られていると、偏った思考で自他を苦しめていた事実に向き合うのはとても難しい。まず事実と向き合うためには、自分も苦しいことを認めることが必要ですが、これもしんどい作業です。

だから弱者に対して筋違いな攻撃をしてしまったり、「今のやり方こそが正しい」と既存の「男らしさ」をかえって強めてしまったりする。なんとかあがいて、しんどさをごまかそうとしている男性がいると思います。

「弱さを開示し、言葉で語る」

——仕事に没入する男性の中には、「心を開く人がいなくても、職場以外に知り合いがいなくても全然しんどくない」と思う人もいます。「男性の生きづらさが社会問題だ」というと、「余計なお世話」と反発する声もあります。

そういう男性こそ肩の力を抜いて、内なる偏見や弱さを認めると、楽になるのではないかと思います。

BTS は自分の不完全さも含めて開示し、変わろうとジタバタする格好悪い姿も見せました。「弱さを開示し、言葉で語る」というのは男らしさの呪いの対極にあります。

——男性が「弱さを認める」ということですか。

男性が欲しいのは「尊敬」だと思うんです。自分の無知や過ちを認めるほうが、実は尊敬されるのですが、そうした振る舞いができる男性は少ない。

BTS は自分の弱さを勇気をもって認めました。ダメなところが可愛いから支持されたのではありません。普通の人だったら怖くてできないことを本気でやったからなのです。

「強さ」や「勇気」という言葉の再定義にもなりました。だから、なんと勇敢で強い人たちだろうと尊敬された。実は男性が欲しいものが BTS にあると思います。

——BTS のメンバーたちは、実に感情表現が豊かです。互いにいたわり合い、寄り添い、時には一緒に涙を流す。語り合い、成長していく過程が、ネット上にある数多くの動画から伝わってきます。感情を抑えて律する「男らしさ」とは対極です。

BTSは「Love Myself」というキャンペーンで、ユニセフと共に子どもと青少年への暴力の撲滅をめざす呼びかけをして、国連でスピーチする際にもその重要性を語りました。そのままの自分を受け入れ、愛そうという意味です。

「もっと頑張らないとダメだ」と努力しても、格差を一向に埋められない社会で、「もっと自分を大切にしてい、愛していい」と言ってくれる人を多くの人が求めていた。それが BTS が支持された理由の一つです。

他人と比べて自分を誇るのではありません。「僕は僕のが大好きだ。誰だって自分自身を愛していい」という意味なのです。

彼らは「あなた自身を愛するために、BTS を使ってほしい」とも語りました。自己肯定感の低い人が「BTS を好きな自分を好きになる」という形で、自身を受容できるようになる。

それだけ現代の社会では、人が人間扱いされていない。BTS が示しているのは、「個の尊重」をたたえる価値観です。「お国のために死ぬ」「大義のために生きる」といった男らしさとは全く異なる強さがあります。

「個の尊重」という価値観

——軍隊は、個の尊重とは対極にあります。メンバーたちが韓国の徴兵制度にのっとり入隊することを発表したことには驚きもありました。

メンバー各自が兵役についてどう思っているか分からないし、臆測は避けるべきです。ただ個人的にはやるせない思いです。

韓国では、男性が支持するアスリートやクラシックの世界的スターは兵役が免除されるのに、主に女性や若者が支持するアイドルやエンタメの分野の功績は認められなかった。男性優位の視点を感じます。

結果として「どれほどオンナコドモが騒ごうとも特別扱いしない。世界を動かすのは男の理屈だ」というメッセージになってしまったとも言えるでしょう。

——BTS は米ビルボードチャートで1位を獲得したり、グラミー賞にノミネートされたりしたのに、認められていない、ということですか。

米国で成功し、白人に認められたから、BTS がすごいものではありません。

白人こそ素晴らしいという20世紀型の美の規範や、白人男性の権威が依然として強い世界にあって、多くの国・人種の人たちに、「聞きなれない言語でアジア系の男性が歌っていても、BTS は素敵だ」と素直に感じさせた点です。

——違う物差しを示した、ということですね。

私はオーストラリアと日本を行き来して暮らしています。オーストラリアにいるときはアジア系のマイノリティー。偏見や居心地の悪さを感じたことはあります。アジア系がいくら努力しても白人中心社会の中では成功に限度があることを指して「竹の天井」という言葉もあります。

私は、オーストラリアで育つ息子たちに白人になることをめざしてほしいわけではない。アジア人としてグローバルな支持を得た BTS は、従来の白人男性中心の主流文化を相対化する新たな価値観を示したのではないのでしょうか。

——BTS が示したのは、大きな変化なのですね。

日本にいると気づきにくいですが、日本人は世界ではマイノリティーです。

アジアでも他の国が成長している。平均賃金も国際競争力も、今や韓国の方が高い。

これからの時代を生きる私たちは、マイノリティーとしての覚悟が必要です。BTS が体現したパラダイムシフトは、日本の男性にとっても希望になるはずです。



ご意見・ご感想は、shakaibu@asahi.com



へお願いします。(聞き手・伊藤恵里奈)

こじま・けいこ 1972 年生まれ。東京大学大学院情報学環客員研究員。近著に「おっさん社会が生きづらい」(PHP 新書)。